

環境情報センターだより

発行 宮城県保健環境センター
住所 仙台市宮城野区幸町 4-7-2
TEL 022-257-7183
FAX 022-257-7194

2010 年
第 9号
2010. 6. 10

五月の後半は、「やませ」の影響で梅雨寒のような天気が続きましたが、六月に入り、梅雨入りを前にして爽やかな青空が続いています。

センター周辺では、シロツメクサ、タンポポ、ハルジオン、ジシバリなどの野草が一面に咲き誇り、これから雨を得てますます繁茂しそうな勢いです。普段は気にもかけない野草たちの可憐な姿を見ると、旺盛な生命力を感じさせてくれます。



センター構内に咲いている野草「ジシバリ」

さて、センターだよりも発行から3年目を迎えます。いっそう充実した情報誌にしたいと考えておりますので、読者の皆様からも情報を提供していただければと思っております。

(企画総務部)



◆「環境教育リーダー研修会」の開催

環境政策課 高橋利恵

4月16日、宮城県庁において、環境教育リーダーを対象とした研修会を開催しました。今回は、東北大学大学院環境科学研究科の石田秀輝教授に「環境リーダーに求められる鳥の眼的視点で考える」と題した講演をいただきました。「人間にとっての地球環境問題とは人間活動の肥大化であること」、また、「物事を鳥瞰的に捉える」、「自然に生かされていることを知る」、「自然を活用する術を考え、人間の物欲が精神欲へシフトするような新しいライフスタイルの提案の必要性」などについてお話をいただき、リーダー活動の意義を再認識する有意義な機会となりました。

◆「第四回環境教育実践セミナー」の開催

10月に名古屋市で開催される生物多様性条約締約国会議（COP10）の開催を期に生物多様性に関する話題が取り上げられるようになり、各地で自然保護活動やイベントが開催されています。5月14日（金）に開催したセミナーでは、テーマを「地球環境と生物多様性の保全をめざして」と題して県内で行われている生物多様性の保全と自然環境の保全の取り組みについて紹介しました。

はじめに宮城県自然保護課の岸野 清氏から生物多様性の意味や私たちにもたらす恵みについての説明がありました。また、地球温暖化による影響や外来種による生態系への影響など人為的な影響などによって脆弱な生物多様性が失われていることの説明があり、自然環境保全の実例として、栗駒山麓の雪田植生復元や世界谷地などの湿原植生保護活動について紹介がありました。



講演会の様子

次に実践的な環境保全活動として NPO 法人シナイモツゴ郷の会 二宮景喜氏から絶滅危惧種シナイモツゴをはじめ旧品井沼やため池に生息する淡水魚類の生息環境の保全や外来種ブラックバス対策に関する調査・研究の紹介がありました。田園地帯のため池に生息する在来魚類の復元など、このような自然再生に取り組む NPO 活動において、これを後押しする地域の市民や専門家、また農業関係者など多くの方々の理解や協力によって成果をあげることができるなど、今後の地域の環境保全活動への取り組みについて示唆に富んだお話を聞くことができました。



◆夏休み環境学習教室の開催予定

昨年の夏休み環境学習は、109名の小中学生とご父兄の皆さんに参加いただきました。今年も7月下旬から始まる夏休みの期間に「地球温暖化」、「地球環境」、「自然・共生」、「環境・エネルギー」や「環境調査」の5つのジャンルの中からテーマを選んで開催する予定です。夏休み環境学習に関する日程やテーマの内容、参加申し込み方法などについては、7月上旬に保健環境センターのホームページに掲載いたしますのでご覧ください。

みやぎの自然

◆「豊かな自然が残る松島・福浦島」

松島公園管理事務所 内海逸郎



福浦島から見た松島湾

みなさんは日本三景の一つであり風光明媚な『県立自然公園松島』を何度か訪れておられると思いますが、そのなかでも多くの種類の草花や樹木が自生し、植物の宝庫として知られている福浦島について紹介します。松島湾内の島々は乾燥地が多く、それに耐えられる植物や潮風に強い植物しか育ちません。しかし福浦島は比較的大きく、他の島々には見られない丘や傾斜地など多様な地形に恵まれており、また全島が大木に覆われて落ち葉による土中の栄養分も多いことなどから自生する樹木の種類も多彩になっています。さらに、藩政時代から大切に保護されてきたことも、島内に美しい林と豊富な種類の植物を今に伝えている大きな要因となっているようです。アカマツ、スギ、モミなどの大木が特に目につきます。ヤブツバキの生育も見事です。また、ユズリハのように、太平洋岸では宮城県が北限のものもあり、樹木にかけてある解説板を見ながら散策すれば新たな知識を得ることもできます。木々の名や形、香りなどを観察しながら島内の散策を楽しむ……。島内には遊歩道のほか見晴台や公衆トイレなども整備されており、名勝・松島と自然観察を同時に満足させてくれる散策路として地元や観光客の方々に愛されています。

島内にある無料休憩所を過ぎてすぐの所に松島町の町花であるセッコクが植えられています。セッコクは東洋蘭の一種で本県が北限とされており、松島湾内に自生していました



瑞巖寺セッコク



湾内に自生するセッコク

が乱獲のため絶滅の危機に瀕していることから、松島町と農協等では手樽海浜公園近くにセッコク育成施設「愛・らんど松島」を設け、バイオテクノロジーによる増殖で、「瑞巖寺セッコク」の育て方体験や販売等を行っており、松島の新しい観光資源として期待されております。セッコクは6月中旬頃から開花しますので、松島にお出かけの際はぜひお立ちよりいただければと思います。



◆ ヘクソカズラのおい

保健環境センター 鈴木康民

香しいかおりを放つ植物の代表としてチンチョウゲやクチナシなどが連想されますが、センターの外堀にはつる性のアイビーに混じってヘクソカズラというまさに名前のおりの臭いを放つ植物が沢山生えています。小学生の頃に校外学習で植物採集に行ったとき始めてその臭いを嗅いで以来、この名前が頭から離れなかったのがこのヘクソカズラです。



植物図鑑などを調べるとヘクソカズラの学名のうち属名はラテン語の「汚物」または「悪臭」に由来し、つぎの種小名は「よじ登る」という意味が付けられています。まさに悪臭を発生し、どこにでも伸びていくつる性植物と見られたのでしょう。ヘクソカズラにとっては誠に気の毒な名前の付けられ方ですが、やはり名付けた人が感じた臭いの印象が強かったからでしょう。では、ヘクソカズラという和名はいつごろ誰が付けたのでしょう。7世紀から8世紀にかけて編まれた万葉集の中には植物を詠んだ歌が約1500首あるそうですが、その中にただ一首に「くそかずら」の名前で登場

ヘクソカズラの花 します。このことから学名が付けられる以前からすでに和名として存在していたということになります。ではその後、この名前にさらに「へ」と付け加えて臭いのバージョンアップ？に関わった人がいると考えられますが、定かではありません。いずれにせよ葉や茎を揉むとやや不快な臭いがするため屁と糞の名前が付いてしまった植物で、どこにでもある身近な植物です。花は中心部が赤く白いベル状で可愛らしく、秋には山吹色の実をいっぱい付け、冬の野鳥にとって貴重なえさとなります。

また、つると実は臭いもなく姿、恰好や落ち着いた色合いが好まれており、リースやドライフラワーの材料として使われます。玄関ドアや居間の



ヘクソカズラの実

壁にリースがあったらよく見てください。きっとヘクソカズラはいやな臭いも発せず皆様のお役に立っていると思います。

参考：ヘクソカズラはアカネ科ヘクソカズラ属，別名ヤイトバナ，サオトメバナという。
(牧野植物大図鑑から)

お知らせ！！ 環境教育活動の様子(写真, 記事)などをお知らせください。
センター便りに掲載したいと考えています。



- ◆ 今回入手した環境教育教材, 図書などの概要を紹介します。
どうぞご利用ください。

なお, 貸出についてはホームページ「環境学習」のページをご覧ください。

■ 環境教育教材

《 酸性雨採取キット 》

酸性雨は化石燃料の燃焼や火山活動などにより発生した硫黄酸化物や窒素酸化物などにより酸性化した雨であり, 湖沼や土壌が酸性化して, 森林や生態系に影響を与える他, 屋外にある銅像を溶かしたり, 建物の腐食を進行させるなどの被害を与えている環境問題の一つです。

このキットは降雨を採取して, 雨の酸性度を測定するための便利な器材であり, 降雨を感じてフタが開き, 雨を約 5ml (1 mm の降雨) ずつ分取し, 最大 27mm の降雨まで採取することができる装置です。



■ 図 書

《 地球環境 46 億年の大変動史 》 田近英一(著) 化学同人(出版社)

概要:地球は誕生以来、様々な環境変動を経験し、一方では、生命があふれ、温暖湿潤な環境を長期的に保てるほど「安定」です。激甚な環境変動を繰り返しながらも生命を育むほど安定な地球の環境。温暖化による気候変動が懸念される現代、46 億年の地球史からなにを学べるでしょうか。

《 食品の安全とは何か ～食品安全の基礎知識と食品防御～ 》

今村知明(著) コープ出版(出版社)

概要:食の安全に関する事件が多発し、食品への不安が大きくなっています。本書では、食品の安全とはなにかについて、食品が本来もっているリスクから説き起こし、基礎知識と食品防御について解説します。

《 “食の安全”はどこまで信用できるのか ～現場から見た品質管理の真実～ 》

河岸宏和 (著) アスキー(出版社)

概要:相次ぐ「食の安全」が問われる事件の背景にはどんな問題があるのか。消費者が気づかない数々のトリックから浮かび上がる食品業界の常識とは。品質管理のプロとして業界を見続けてきた著者が解き明かします。

《 自己デザインする生命 ～アリ塚から脳までの進化論～ 》

J.スコット・ターナー(著) 青土社(出版社)

概要:そびえ立つアリ塚の塔、高度な機能性をもつ血管や骨、世界を認識する視覚や脳——。意図的にデザインしたかのような精妙さが生まれる理由は、ダーウィンの「自然選択」だけでは説明できません。まったく新しい進化のメカニズムを提唱する生物学・生理学の最先端。

《 生命と食 》 福岡伸一(著) 岩波書店(出版社)

概要:食をめぐる問題が多発する今こそ、原点から考えよう。私たちはなぜ、他の生物を殺め、食べ続けなければ生きてゆけないのか。食の安全を脅かしているのは、何なのか、誰なのか。気鋭の科学者による、いのちの講義。

《 動的平衡 ～生命はなぜそこに宿るのか～ 》 福岡伸一(著) 木楽舎(出版社)

概要:生物を構成する分子は日々入れ替わっています。私たちは「私たちが食べたもの」にすぎません。生命とは、絶え間ない流れの中にある動的なものです。読んだら世界がちがって見える、哲学する分子生物学者が問う「命の不思議」。

《 低炭素エコノミー ～温暖化対策目標と国民負担～ 》

茅 陽一 他(著) 日本経済新聞出版社(出版社)

概要:コスト不在の非現実的な議論を正します。排出削減にかかる費用は?環境税でどこまで抑制できる?温暖化懐疑論の問題点を明らかにし、正しいデータと現実的なシミュレーションを駆使して具体的な対応を提言します。

《 知っておきたい単位の知識 200 ～身近にあるけど意外に知らない単位の不思議ワールドへようこそ!～ 》

伊藤幸夫 他(著) ソフトバンククリエイティブ(出版社)

概要:私たちはいろいろな機会に「単位」を学び、使用していますが、それがどのようにしてつくられたのか考える機会はほとんどありません。本書では、「単位」が生まれた由来や進化の道すじを追いながら、身近なところでどのように使われているのかについて探っていきます。

《 海の色が語る地球環境 ～海洋汚染と水の未来～ 》 功刀正行(著) PHP 研究所(出版社)

概要:海の色を見れば、その環境が手に取るように分かる。本書は十数年もの間、自ら観測船に乗り込み調査した著者が海洋汚染の実態を報告します。水なしでは生きられない我々が、地球の7割を占める海を知らずに環境は語れません。

《 幼児のための環境教育 ～スウェーデンからの贈りもの「森のムツレ教室」～ 》

岡部翠(著) 新評論(出版社)

概要:「森のムツレ」に出会ったことがありますか?「ムツレ」とは森に棲む妖精のことで、子供たちに自然の大切さを楽しく伝えてくれます。日本でもできる!環境先進国から来た自然教室を紹介します。

《 コルの「子どもの学校論」 ～デンマークのオルタナティブ教育の創始者～ 》

クリステン・コル(著) 清水満翻(訳) 新評論(出版社)

概要:ペスタロッチに並ぶ重要人物、コル唯一の論文などを本邦初翻訳。日本で注目を浴びている北欧教育の原点がここにあります。

《 幼児期に育つ「科学する心」 》

小泉英明 他（編著） 小学館（出版社）

概要：本物の科学者を育てるには幼児期こそが大切。脳科学者、教育学者、科学研究者からの提言。ノーベル賞受賞者らにもインタビュー。世界も注目するソニー教育財団の先駆的取り組みを紹介します。

《 BIG GUREEN BOOK 》

フレッド・ピアース（著）、イアン・ウイントン（絵） ほんの木（出版社）

概要：大人も子供も学べる、イギリス、アメリカ、カナダなど、世界 10 カ国で出版された「緑の地球を考える絵本」。一緒に考えませんか、私たちの地球のことを。

《 絶滅した奇妙な動物 》

川崎悟司（著） ブックマン社（出版社）

概要：40億年の生命の歴史のなかで、確かに地球に生息した奇妙な動物総勢113頭、オールカラーで大胆に復元しました。彼らはなぜ繁栄し、絶滅したのか？知的好奇心をくすぐる神秘の古代生物図鑑。

《 持続可能な発展の経済学 》

ハーマン・E・ディリー（著） 新田功 他（訳） みすず書房（出版社）

概要：現行の経済体系のどこに持続不可能な論理が働いているのか？持続可能な社会を考えるとき、ディリーの経済思想を今後避けては通れないだろう。本書はその要点を凝縮した待望のディリー入門書。

■ DVDソフト

《 ディスカバリーチャンネル なぜ？に挑んだ科学の歴史100 地球科学編 》

角川書店（制作）

概要：地球とは、いったいどのような惑星なのだろうか？中心部は7000度を超え、強力な磁場が宇宙から降り注ぐ危険な放射線を防いでいます。かつて、すべての陸地は一つの大陸”パンゲア”だったと考えられ、今でも1年に数センチの割合で移動しています。内部構造からプレートテクトニクス、さらには温暖化まで、ダイナミクスに変化を続ける地球のメカニズムを解明してきた12の大発見を振り返ります。

《 ディスカバリーチャンネル なぜ？に挑んだ科学の歴史100 化学編 》 角川書店(制作)

概要:人類にかけがえのない財産をもたらした化学。分子、原子、電子とマイクロの世界の解明が進み、さまざまな化合物が作られるようになりました。現在のアルミニウム産業やプラスチック、半導体などは、すべて化合物の研究から生まれました。そして今、”魔法の素材”カーボンナノチューブに注目が集まります。化学を発展させた13の発見を紹介します。

《 ディスカバリーチャンネル なぜ？に挑んだ科学の歴史100 物理学編 》 角川書店(制作)

概要:人類の好奇心は、尽きることを知りません。宇宙とは？ 物体を構成しているものとは？ リンゴを木から落とす力とは？ ガリレオ、ニュートン、ファラデー、マックスウエル、アインシュタイン……偉大なる天才たちが、自然界の法則を解き明かしていきました。そして今、自然界を司る究極の力「万物の理論」確立に挑みます。素粒子から宇宙まで、物理学の革命的な13の発見を振り返ります。

《 ディスカバリーチャンネル なぜ？に挑んだ科学の歴史100 生物学編 》 角川書店(制作)

概要:生命とは何か？ 17世紀初頭、科学者は顕微鏡に魅了され、未知の世界を発見していきました。細胞の研究はやがて、再生医療につながる幹細胞を発見します。食物からエネルギーを作り出す仕組みやセロトニンなどの神経伝達物質、成長や代謝を助けるホルモンの解明も進みます。微生物の発見から細胞の仕組み、地球規模の生態系にいたるまで、13の大発見から生物学の歴史を振り返ります。

《 ディスカバリーチャンネル なぜ？に挑んだ科学の歴史100 天文学編 》 角川書店(制作)

概要:人類ははるか昔から空を見上げ、天体の動きを観察してきました。天動説と地動説が論争を巻き起こす中、ガリレオが木星の衛星を発見しました。アインシュタインは一般相対性理論を発表し、ハッブルは宇宙の膨張を発見しました。その後も、ビッグバン、ブラックホール、ダークエネルギーなど宇宙の謎に挑む研究が続きます。古代から現代まで、天文学を発展させるきっかけとなった13の偉大な発見を解説します。

《 国立環境研究所公開シンポジウム 2009 今そこにあるリスク～環境リスクの真実を語ろう～ 》 (独)国立環境研究所(制作)

概要:2009年6月に東京と京都の会場で開かれた国立環境研究所の公開シンポジウムの講演内容を紹介します。講演1「環境リスク研究へのいざない」。講演2「メダカ、ミジンコのオス・メスが化学物質で変わる～見えにくい生態リスク～」。講演3「環境汚染物質の測り方～ハイテクとローテクからのアプローチ～」。講演4「私たちの健康に害があるほどに空気は汚染されているのか」。講演5「身の回りの環境汚染はアレルギー疾患を悪化させる」。